

明治大学外国人研究者招聘制度 報告書

<招聘教授・研究員の情報 / Guest Professor・Guest Scholar>

氏 名	下境真由美
Name	
所属機関(派遣元)	オルレアン大学
Affiliation (Home Organization)	
現在の職名	准教授
Position	
招聘期間（日本への入国日から出国日）	2025年4月1日～2025年6月30日
Invitation Period (from the date of entry to departure)	
Field of Research	現代文学・比較文学
ホスト教員氏名と所属学部研究科等	鶴戸聡 国際日本学部
Name of host teacher and affiliation at Meiji University	

<外国人研究者からの報告 / Foreign Researcher Report>

①研究課題 / Research Theme
マイノリティによる文学、植民地と文学、戦争と文学
②研究概要 / Outline of Research
本研究の中心には、マイノリティによる文学、母語とは別の言語で書く作家たちへの関心がある。日本語文学とフランス語文学は、地理的な距離にもかかわらず、植民地主義の歴史を背負っているという点で共通している。それゆえ、双方には植民地出身の作家による文学、植民地からの移民の二世による文学が存在する。これらの文学は、フランス社会、あるいは日本社会における差別の告発、新たなハイブリッドなアイデンティティの表現として機能してきた。そして、このような「伝統的文学」には見られないテーマを提示することによって、20世紀・21世紀の新しいエクリチュールを創りだしてきた。 このように、文学は周縁に位置する人々に発話・表現の可能性を与える手段としなってきた。その一方で、マイノリティの声は権力の側からは脅威として捉えられることもあり、ときには検閲の対象となったり、権力に絡め取られたりしてきた。文学は時勢に逆らう表現の手段であるとともに、体制への迎合を表現する道具ともなり得る。 初期のフランス語表現のアルジェリア文学においては、フランスの植民地政策に迎合する作品が現れた。日本においては、太平洋戦争期に文学が積極的に政治的な目的で利用された。日本人作家たちが多くの国策文学作品を残す一方、植民地出身の作家たちもこの流れに無関係ではなかった。本研究の目的は、植民地出身の作家の作品を射程に入れつつ、文学の負の遺産に注目することである。
③招聘期間中の研究活動の実績 / The research results as Guest Professor・Guest Scholar
本研究では、1940年代に出版された『文学報国』、『新日本』等の新聞・雑誌の文献のリサーチが必要であった。大学図書館を利用することによって、これらの文献の多くを閲覧し、分析することが可能となった。今回の研究成果は、フランスにおける論文指導資格取得を目的とした論文の執筆に役立てるつもりである。 そして、これまでも水声社「エル・アトラス」叢書において協力してきたホスト教員の鶴戸聡とは、フランス語文学を巡る議論の機会を持つことができた。鶴戸には日本におけるフランスのアルジェリア系移民二世の作家、アズーズ・ベガーグの講演開催においても協力を得た。鶴戸の科研費の研究グループの協力のもと、5月15日にベガーグの会合が明治大学にておこなわれた。研究者間の交流という形でおこなわれたこの会合は、移民と文学のテーマでの活発な意見交換の場となった。そして、5月26日の日仏会館における同作家の講演においても、鶴戸聡の協力を得た。70名の参加者のあったこの講演は、ベガーグの作品を日本の読者に紹介する機会となり、またフランス・日本における移民をめぐる講演者と聴衆との意見交換の場となった。鶴戸の学部3年生の授業に参加し、学生たちと交流を持ったことも貴重な体験であった。 また、文学部の竹内栄美子の修士課程の学生を対象としたゼミにも参加した。沖縄文学をテーマとした学生の発表・議論は、「マイナー文学」研究に携わるものにとっては、興味深いものであった。また、プロレタリア文学の専門家である竹内には、国策文学研究についての貴重な助言を得ることができた。

